

帝キネ時代映畫

原作脚色者

岡 榮三

監督者

渡邊 新太郎

撮影者

市川 百々茂

主演者

第三百二十四號

少くとも此の會社で此の作品を作り得たことは近來の慶事である。そして營業方面の當事者が是れを認容し、然も斷然特作品たらしめんとした覺醒(?) 振りに就ても大いに稱讃の詞を贈らねばならぬ。「夜鴉」「水底」等の稍々光的な新鮮さが、此の「道中双六」では急速度に水準を高めたと云つては、それは劇その物には何等の新を認めるのではない。散切物は既に一種の流行であり、流行は奇とする程の價値すら持たない。四年以前此の作品と似通つたものを呂九平が書いて居る。劇及び物語の優劣を論ずるならば、呂九平の「文明の復讐」の方により寛きものを認める。随つて此作品は何等物語や筋に敬意を拂はれないが、反對に渡邊君の監督手法、カメラの位置の撰定、並びに採光(是は三木カメラマンの領域かも知れぬ)等に於て更に三木君の眞き撮影等に於て、價値の70%を定めて居、20%の演技、10%のストーリーである。が70%とする其等技巧に於ても、單に當社作品として——と云ふ一項を附加せればならぬこと。残念に思ふ。何故なら既に他社には「浪人街」「崇禪寺馬場」等が發表されて居て、カメラマン等も純然同軌道の行き方だからである。模倣でないには相違なからうが、其處に前繼あることを悲しむ。而も他社作品はストーリー30演技20、その他の技巧と云ふ程のもので其處に渾然たる完成を示して居たのに、是は餘りにも、筋、演技等が監督カメラ等に劣つて居る。随つて我々は未だ純然たる興行價値的作品だとも、所謂科學的完成作品だとも斷言し得ないが、少くとも興行價値の點に於ては他社此種の作品に一段劣るかも知れない。併し此處に此の作品が誇り得るものは、凡ゆる當社作品の類型を敢然と脱し、而も類型的作品を一蹴し得るに充分であつたことである。スターを白く塗らすとも、無暗に劍戟シーンを用ひずとも更に云ふなら形式が内容を決定する作品の誕生が如何程本邦斯界に一活路を展きつ、あるかを知り得た點に於て、帝キネ自身が此の製作者達に感謝すべきであると同時に、この作品を切除せず市場に出さしめた營業當事者に、製作者側も一味の謝意あるべきである。(寫眞版紹介)

興行價値——雄篇。文字通り劃期的超特作。都會代表館も大いにかけてよき呼物。
 (三月一日 大阪芦邊劇場、神戸相生座)